



TITLE:

<批評・紹介>佐伯富著「中國鹽政史の研究」

AUTHOR(S):

香坂, 昌紀

---

CITATION:

香坂, 昌紀. <批評・紹介>佐伯富著「中國鹽政史の研究」. 東洋史研究 1988, 47(1): 150-160

ISSUE DATE:

1988-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154228>

RIGHT:

# 批評・紹介

佐伯富著

## 中國鹽政史の研究

香坂昌紀

一

昭和三十一年「清代鹽政の研究」を刊行された佐伯富氏が、今般「中國鹽政史の研究」なる本文八百頁を超える大著を發表された。

本書は、第一章「緒論」、傳説時代から後漢代までを扱われた第二章「鹽と古代文明」、三國から唐末までの第三章「中世における鹽政」、五代から清末までの第四章「近世における鹽政」、第五章「結論」の全五章より成るが、古代から明代までは昭和五五年度から六一年度にかけて大谷大學で講義されたものとのことであり、うち「元代の鹽政」は六〇年に東洋學報に發表されたもので、豫め本書の一部に充てることを意圖されていたものと思われる。又、「清代の鹽政」は氏の前著及びそれに前後する一連の研究をふまえられたものである。

著者は本書作製の意圖について、「はしがき」で「清代の鹽政を研究しよう」とすれば、どうしても明代に溯らなければならぬ。こうして最後には古代まで行かなければ、眞の清代鹽政の意味は明確にならない。……我が國ではある問題につき、古代から近世までを

通して研究した書籍はあまり見當らないようである。尤も各時代の関連の論文を集めて一書となしたものはあるが、それは論文集に過ぎない。私は微力ながら本書においてこれに挑戦した。」と述べられている。なお、本書の構想は既に昭和四二・三年頃にたてられていたとのことであり、本書も着手から刊行まで凡そ八年の月日を費されている。主に前著に依據された清代の部分も、全文が書き改められ、一書としての統一性・完整度には十分に配慮されている。勿論、前著を貫ぬく著者の問題意識・史観は本書にあつても同一であり、本書が氏のいわゆる「論文集」に止まるものではないことは明らかであらう。

以上によつて知られる如く、本書は清代鹽政の第一人者たる著者が、これを研究の起點とされ、明確な問題意識と並々ならぬ意欲とをもつて、遠く古代から清末に至るまでの各代の鹽政の變遷を研究されたものであり、多年に亙る著者の鹽政研究の總決算・到達點ともいふべき貴重な成果である。著者は本書において、從來空白乃至それに近かつた時代については、新たにこれを開拓され、既に研究が提出されている時代については、新知見を交え新たな問題を提起されつつ諸成果を綜合されており、鹽政を中心とし、上は權力の消長から下は鹽徒・祕密結社に至るまで、凡そ鹽の係わる限りの廣範な社會の諸相について、氏独自の周詳稠密な論によつて追求し解明されている。本書が初の本格的中國鹽政史の專著として、我が國は勿論、廣く東洋史學界にとつて、その裨益する所測り知れない貴重な成果であるを言を俟たない。

折しも、本稿執筆中、本書に對する恩賜賞・學士院賞の授與が發表された。碩學畢生のライフワークの完成に對し、これ以上の榮譽

はないと思われる。心から慶賀申上げる次第である。

## 二

さてこの龐大な本書を貫ぬく主題は「鹽が中國の歴史の上で演じた役割」であるが、換言すれば、「鹽・權力・鹽商、そして近世以降の鹽徒・秘密結社」といえるかと思われる。著者は第一章「緒論」で、本書の目的につき「鹽が中國の歴史でいかなる役割を演じたか、これを政治・經濟・文化などの各方面から考察し、鹽の中國歴史上における意味を探ってみようと思うのである。」と簡明に述べられ、第五章「結論」で、專賣制施行により鹽がより重要な役割を果たすこととなった近世を中心として次の如く結ばれる。即ち、唐代安史の亂後に實施された專賣制は清朝滅亡まで千年以上も續いたが、この時期は獨裁政治の時代であり、他に類例を見ない長期の專賣制が、中國社會に諸種の影響を與え、特殊な性格を賦與した。長期に亘る專賣制を可能にしたのは、產鹽地が限定され販路も統制し易い中國の地理的條件にもよる。專賣制は鹽商をも擡頭せしめ、五代には分裂を不便として宋代の天下統一を導く一因ともなったが、宋代には政商として獨裁制の財政基盤を支えると共に、近世文化の發展にも寄與した。鹽商はシルクロードの延長線、及び遊牧地帯から南方へ至る縦貫路の交點に位置する山西商人が主體であり、古くから歴代首都に鄰近し政權と密接な關係を樹立してきた彼等は、近世になると獨裁權力を支え發展し、清代には兩淮のみならず全國の鹽業を牛耳るに至った。しかし清末には國內外の情勢變化の影響を受けて衰微せざるを得ず、それは清朝國家權力の衰退に拍車をかけることになった。專賣制が生み出す私鹽の徒は、權力による規制の

中で私鹽收入に支えられつつ強大な武力集團へと成長し、近世中國社會に多發し、時に王朝をも滅亡させる秘密結社へと發展する。かくて中世の混亂を收拾すべく出現した近世獨裁制は鹽專賣に支えられ、一方では身中の癌ともいへべき秘密結社を生み出し、その對應に迫られながら變遷したともいえるのであり、鹽政研究は中國社會、とりわけ近世中國社會の性格究明のためには重要にして不可缺である。

以上、「結論」は近世における鹽の役割を中心に結ばれているが、本書の特徴の一つは著者が始めて扱われたという古代・中世においても、近世と同様に鹽が重要な役割を果たしてきたことを解明されている點にあるといえよう。即ち、第二・三章を通して、一貫して論述される主題は、鹽が歴代の權力の掌握・盛衰・交替にとって重要な役割を果たしてきたことであり、これに近世を加えれば、この主題は中國の歴史全體を貫くことになる。加えて、鹽と權力との間に在し、明清時代に全盛期を迎える山西商人の存在を、遠く古代にまで溯及して指摘されている點も注意される。

## 三

ついで本論部分の紹介に移るが、何分本書は大著であり、しかも宋代以降の各節は、凡そ鹽に係わることは全て網羅されているといつても過言ではない程多岐に亘り、その各々に氏獨自の詳細緻密な論が展開されている。従つて所定の紙數で章・節を逐い、正確且つ簡潔な紹介をすることは、筆者力量の故もあつて不可能に近い。よつて比較的知られている部分は極力省略した蕪雜なものにならざるを得ず、著者には豫め御海容をお願いすると共に、諸賢には本書を

一讀されて自から本書の眞價を確認されるようお願いする次第である。

## 第二章「鹽と古代文明」

本章は、第一節（以下略記）傳説時代から殷周時代へ、二、鹽と春秋五霸、三、鹽と戰國七雄、四、漢代における鹽政、五、むすびの五節から成り、第四節は更に鹽生産の増大・豪商・專賣・後漢代の鹽政等々の六項に分けて論じられている。以下まとめて紹介したい。

本章は先ず宮崎市定氏の卓見をふまえられて傳説時代から始められる。即ち、古代中國世界は、鄰近する山西省西南部の解州鹽池の掌握をめぐって權力の交替が行われ、堯舜禹の禪讓傳説もその裏には血惺い解州鹽利をめぐる争鬭があったとされ、殷・周も同じく解鹽によって強大となり、富の集中による奢侈と懦弱によって弱體化したとされる。周の東征自體、解鹽確保が目的で、周の版圖は解鹽地域にはば一致しており、殷の遺民が鹽商として活躍したとされる。春秋諸侯は軍隊維持のため盛んに山林叢澤の開發を行行が、中でも鹽利は重要であり、五霸の多くは鹽利により霸權を握り、それを權臣に奪われて霸權を失った例が多いことを指摘されている。戰國も魏の強大化は解鹽の利によるとされ、後世の山西商人の原初的形態を示されている。秦も商鞅による輸入解鹽に課した重税により強大化し、四川鹽井開發も鹽利重視のためとされる。漢代、版圖擴大・人口増大等による鹽の需要増大が、春秋以來の鹽商の活躍を刺激し國家權益を侵すに至った。中國史上最初の專賣制實施は、外征等の財源確保の他に、豪商の手より鹽利を奪回せんとする目的もあったとされる。又、後世の專賣制を導く理念として、山海の利が本

來天子に歸屬すべきもののとの觀念が確立されていたこと、及び後世の山西商人の原型が見られることを重視されている。後漢代では初め王莽專賣の弊に鑑み、鹽税のみ徴して專賣は行われなかったが、後に財政窮迫により再開されたとして、その時期としては建初六年説に依らず元和元年とされている點は注意される。後漢末には專賣制は廢止されるが、國家權力が弱体化して鹽利を求める豪族權貴の動きを抑止できなかったためとされている。

## 第三章「中世における鹽政」

本章は、三國・晉・南朝・北朝・唐の各代の鹽政、及びむすびの六節に分けられ、第五節「唐代の鹽政」は、第五琦、劉晏の各鹽法や、巡院・鹽商等の八項に分けて評論されている。

後漢末、鹽利は多く豪強が占め、曹操は既に專賣を行っていたが、建國後は解州に加えて山東・淮北等の鹽場をも入手し、後には蜀を滅して四川鹽場をも保有した。魏が一時的にもせよ霸權を確立できたのは、屯田制とこの鹽利によるものとされる。吳も淮南等の海鹽の利を収め、遠く湖北まで進出していた吳の商人とは、後世の例よりみて鹽商であったとされ、四川井鹽に依った蜀と合せ、三國共に鹽利を重要財源としていたと指摘される。魏制を承けた晉は、天下統一と共に鹽政の統一をはかったとして、杜預の專賣策と鹽官の制について述べられ、北方の五胡十六國にあっても、鹽場ある所鹽税を徴したはずとして、南燕が漢人官僚の獻言を用い、烏常澤に鹽官を置いた例を示される。南朝でも、宋に鹽專賣が行われたこと、齊初、豪族の意に迎合して專賣制を廢止したこと、梁に「鹽亭縣」なる地名があったことから、政府經營の鹽場があったことを推測され、ついで陳が專賣を行ったとして南朝の制を通觀されている。

る。北魏では、抑々拓跋部南進の契機の一つに解鹽の入手があったとされ、山西商人と北魏政權との間に密接な關係が形成されたことを指摘される。華北統一後、解鹽統制が一時解かれたのは豪族懷柔のためとし、孝文帝時の鹽の統制は鹽利獨占の富豪統制の意圖もあったとされる。北魏末、財政難にも拘らず統制が廢されたのは、既に豪族を抑えかねたためとされる。なお、北魏代の鹽の統制の改廢については、綿密な考察を本節注で加えられている。北魏分裂以後、東魏・北齊は河北・山東・淮北の鹽利に、西魏・北周は解鹽の利によった。隋初、鹽鐵を含む山澤の禁令が弛められ人心を得たが、これを陳を滅して天下統一を實現する「心理的要因の一」となると評價されている。

唐代、則天・玄宗期に財政膨脹のため鹽の專賣が検討されたが實施には至らなかった。しかし則天の時、解州に令外の官たる鹽池使が置かれたことは、天子直屬の鹽利支配體制の整備として、君主權の發達を考える上で重要とされている。專賣は安史の亂後、唐代前期の制が一變する中で、亂中河北義軍財源として鹽專賣が行われたのを目の當りにしたという第五琦によって始めて行われた。彼の法は、生産者・亭戸を鹽鐵使に隸屬させ、產鹽を全て官が確保し販運する官賣法で、宋代の權鹽法に當る。彼は私鹽禁止・亭戸保護等の策もとり、江淮の鹽利のみで歲入の一割に相當する四〇萬貫の收入を得たが、反面鹽價は十一倍にもなったという。劉晏の制は產鹽地にのみ官を置き亭戸の生産鹽を收買し、これを商人に賣って鹽利を得てその販運を許す法で、後世の通商法の基本型である。彼はまた生産技術の改善・私鹽取締り・漕運制の改善等を行ない大いに成果をあげ、その後財政改革を行った楊炎も兩稅と共に鹽課を重視し、巡

院の機能や權限は益々擴大強化されて、重要財務部局として發展していく。

通商法は鹽商の發達を促し、產鹽地近邊の上農・大賈が資力により鹽商となったが、彼等は國家の保護を受け、天子に直屬するとの意識すらあつて州縣の規制に服さず、鹽價を吊り上げ、或いは鹽價として不足氣味の銅錢の代わりに食糧等入手し、これを高値で官に納入するなど暴利を貪り、國家鹽鐵の利を蠶食して鹽政崩壞の要因をなし、一方州縣官・節度使と結託して土地に投資し、宋代以降の新興地主層の一部となつていく。かかる情勢は私鹽の横行を生み、これに對して鹽法も強化され死刑を含む重刑が用いられるが、私鹽の徒は益々強大となり、黃巢の亂を経て唐の滅亡へと至ることとなる。又、この私鹽取締りの中で、各鹽場の鹽の販路を定める行鹽地の制が始めて用いられたことを重視される。そして近世以降に連なる專賣制・行鹽地制・鹽賊等の「近世的特徴」が既に唐末に出現していたことを注意すべきものと指摘されている。

#### 第四章「近世における鹽政」

本章は、五代・宋・元・明・清の各代の鹽政が、各々一節をたてて論じられており、本書の八割強の紙数が本章に充てられている。更に明代の鹽政、及び著者前著に主に依據された清代の部分のみで、本書の半分以上を占めている。本章の内容の豊富なるは、以上によつても知られるであらう。しかし紙数の都合もあり、比較的知られた明清代については極力省きつつ紹介をしたい。

##### 第一節「五代における鹽政」

本節は、一・はしがき、二・鹽務管理機關、三・鹽の配給、四・鹽法の整備、五・むすびの五項より成り、三は更に行鹽地・鹽の配

給の二に分けて論じられている。

唐末、各地に割據した節度使は、各々その地の鹽利を占めて強大化し、唐を滅亡に追いこんだ。軍閥割據のこの時代、鹽利は軍隊維持の重要財源であり、又兵丁に支給する銅錢確保の重要な手段でもあった。唐末、既に解鹽を掌握していた朱溫は、山東・河北鹽場をも入手して專賣を行い、後唐もこれを承けたが、慶州鹽池を保有するに至って、五代鹽政の大體が整備され、續く中原三王朝に繼續された。五代に鹽の專賣利益が重視されたことは、宰相が財務を兼掌していたことや、後周を除いて大體嚴しい鹽法が用いられていたことによっても知られる。專賣法も鹽利を官が獨占する官賣法が中心で、消費量の多い都市部では權驛院が鹽を供給する「權鹽法」が、鄉村部でも商販の他に、鹽を配給して代價を絹で納入される「蠶鹽法」などが用いられた。南唐では正稅米一斛に三斗を加徴して鹽一斤を給する「鹽米法」が用いられ、閩では上四州に官鹽法、下四州に資産に應じて配鹽額を定める「產鹽法」が用いられている。

各國は各々鹽利を重視したが、中でも唐末より隆盛となった兩淮鹽場は、吳から南唐へと引き繼がれてその強勢を支えたが、後周世宗に破れ江北四州を割讓するに及んで、鹽利を失ったのみならず、逆に多額の銅錢により鹽を購入することとなって急速に衰退に向い、一方鹽利を得た後周は、鹽の供給を外交上にも利用して強大化し、天下統一への動きに「大きな彈み」となったとされる。なお、五代期の鹽法の變遷については詳細な考察をされ、私鹽に對する死刑を含む刑罰規定が、後漢をピークとして漸次緩刑に向い、後周に至って一段と輕減されていることを明らかにされ、このことより、後周世宗の時代には社會の混亂が次第に收拾され、天下統一への氣

運が相當に進捗していたと解される。

## 第二節「宋代における鹽政」

本節は一・はしがき、二・鹽の生産、三・鹽本錢、四・亭戶の階級分化、五・鹽の配給、六・范祥の鹽政改革、七・私鹽問題、八・むすび―鹽法―の八項に分けられ、更に五・六・七項は各々に多くの細目に分けて詳論されているが、それらの名稱は省略する。

君主獨裁政治と強大な外壓を特色とする宋代、膨大な軍事費と官僚組織維持の財源として、鹽の專賣は益々重要となり、國家財政に占める比率も南宋初期には歲入の半ばから八・九割に達するに至ったが、歲出の八・九割は軍事費であり、鹽課收入の大半或いはそれ以上がこれに充當されたという。北宋代、この鹽利の三分の二は淮南鹽によるものであり、その發展が知られる。鹽は鹽池からの煎鹽と海鹽を主とする末鹽に分けられ、後者は濃度を高めた鹽水を、竹盤・鐵盤で煎熬して作られたが、宋代には官が製造支給する鐵盤が生産性を高めたとされる。生産者たる亭戶・竈戶は租賦として、或いは錢を支給されて鹽を納入した。兩浙鹽場では官による生産把握のため、使用盤數や時間を管理する「火伏法」が用いられ、竈數によつて保甲・牌を組む鹽團の制が編成されたが、これを明代の「爐戶團聚法」の祖形として注意されている。貧困な亭戶には工本を貸與する鹽本錢の制が設けられていたが、少額なるに加えて事後貸與や削減支給、官吏の中飽等の弊あつて、その没落逃亡や私鹽流出の一因となった。かくて亭戶間の分化も進行し、上戶は都長・統催となり官吏と結托して一般亭戶を支配收奪し、貧窮戶は工本の借用等を通して、益々之に従屬することとなった。

宋の專賣制は、生産・運搬・販賣を全て官が行う「權鹽法」と、

商人に鹽を賣り鹽利を確保しその販運に委ねる「通商法」とがあり、時代・地域により適宜交替して用いられたが、通商法の利が大であり、范祥の法も大體この制である。しかし鹽務擔當官が、多く權要の子弟で鹽務を食い物にし鹽務紊亂の一因となった。官賣法は、官による鹽利獨占・圓滑なる供給・銅錢入手等を目的としたが、管理機構の腐敗と收奪、役の過重、民への強制販賣、鹽の支給なく代價のみ徴收する等の弊が多出し、官鹽の惡質高價なるによる私鹽橫行と相俟って、鹽利の減少を結果した。通商法は宋初、北・西邊の軍糧調達を目的とし、食糧納入と引き替えに要券・交引を支給して京師樞實務で見錢を、或いは江淮・解州で茶・鹽を支給してその販運を許す「折中」制として行なわれ、後に内地州軍にも行なわれた。邊軍への糧食納入には地の利を得た山西商人が有利で、茶・鹽販賣に乗り出しているのは注意される。この制に類するものが「三説(税)法・四説法」で後者には東南鹽も用いられた。芻糧運搬が困難な地域では時價よりはるかに高價で交引を發給せねばならず、過剩發行と相俟って交引價格が暴落する弊が生じた。京師豪商はこれを安値で入手して暴利を収め、國家の鹽利は彼等に獨占されるに至った。國初、青白鹽流入阻止のため權鹽地域とされていた北方解鹽地域も、この段階では通商法が行われており、專賣制自體が崩壊寸前となった。

これを改革したのが范祥である。彼の法は芻粟納入と鹽引支給とを分離したことに最大の特色があり、鹽引は見錢によって支給し、その緡錢で食糧を購入し、錢幣は樞實務に留めて國庫に充つという制で范祥の鈔法といわれる。彼は又、地宜に配慮しつつ通商法へ切り代えることや、虛估の弊や交引の價格下落を防止し、豪商の暴利

追求を阻止するために都鹽院を置いて交引を買い支える等々の實效性ある改革を行い、邊費の十に八を賄い得たのみならず、民に利をもたらすという成果をあげたと評される。

專賣制が生み出す私鹽の弊は、南宋になって愈々公然化し、南宋末には大都市人口の殆んどが私鹽を食すと稱される程になり、官鹽は壅滞し鹽利は減少する現象が顯著となった。私鹽橫行の例として、行鹽地間の價格差を利用する「越私」が日常的に行われていたことを慶州の場合について詳論されている。

最後に、宋代は全體としては鹽法は緩やかで鹽價も比較的安値であり、これが社會の安定と生産力の増大と好況とを作り出したと評價されている。

### 第三節 「元代における鹽政」

本節は、一・はしがき、二・食鹽法、三・就場支鹽と鹽倉支鹽、四・引法、五・鹽法の崩壊、六・むすびの六項よりなり、二・四・五項は更に幾つかに細分詳論されている。

元代、鹽利は太宗朝から重視され鹽稅も徴されていたが、專賣制や鹽法が本格的に整備されたのは世祖朝で、内外軍事費や各種造營工事の財源確保が目的であった。鹽利收入は世祖の時、既に國家經費の八割にも達し、元一代を通して歷朝中最高の水準にあり、鹽價も高い水準にあった。又、鹽引の發賣高も過大であり、いずれも元代鹽政の特色をなしている。專賣法は宋の權鹽法に當る「食鹽法」と、宋の通商法に當る「引法」とがあり、元初一部を除いて引法が用いられたが、價格高騰の弊を生じ、國家の鹽利獨占の意圖もあって食鹽法に改められ、以後屢々兩法の交替がなされる。しかし時期や地域の区分は必ずしも明確ではなく、時に併行施行の場合もあつ

た。しかし概して都市部や産鹽地では食鹽法が、鄉村部では引法が用いられる傾向があったとされる。食鹽法は民への強制割り當て、鹽價としての生鈔納入強制、官吏の侵奪、官鹽の惡質高價、量目不足等の弊を多出し民を困苦せしめた。鹽引發行も、食糧確保や銀の入手、和羅・賑濟等の財源確保の他に、諸王公主駙馬權臣等への賜與にも多發され、彼等特權層の鹽政への侵入と鹽利侵奪とをもち、一般官僚までが鹽利を蠶食して鹽政崩壞への大きな要因となった。又、權要の下で幹脫商人が辣腕を振ったことや、色目人が鹽商として活躍したことも注意される。

以上の風潮の下で鹽商は對抗上、官と結托して不法に多鹽を入手し、或いは退引を用いて私鹽を扱い、或いは價格を吊り上げる等の手段を用いたが、自から鹽政崩壞の原因を作ったに等しい。かかる中、當然のことながら鹽徒は興起し、元朝滅亡への大きな「動火點」となったとされる。彼等は招安されて、或いは軍に籍せられ元寇に紅巾討伐にと驅り出され、或いは逃亡竈戸の代りに鹽生産に役使されたりした。元末、各地に續發した勢力はかかる鹽徒に係わる者が多く、張士誠や方國珍に加えて、著者は汝寧に發した韓山童らの紅巾についても、次の如く注目すべき見解を提出されている。

汝寧の地は解鹽・河北鹽・山東鹽・淮鹽の輻輳する地であり、明清時代には多くの鹽徒が集中する治安の著るしく悪い地であった。この地を中心として紅巾勢力が急激に伸長したのは、鹽密賣による財源がこれを大半支えていたからと推測される。その傍證として、濠州にて元軍の包圍を受け困窮していた郭子興に對し、朱元璋が「鹽を以て懷遠の粟と易え」郭子興の家を贖した例を引き、彼が多量の鹽を持っていたとすれば、それは私鹽であらうし、私鹽を密

賣して軍國の經費をまかなっていたことは間違いないとして朱元璋を鹽徒の統領とされる。このことより韓山童らも私鹽密賣がその集團を支える最大の財源ではなかったかと推測されている。又、彼等私鹽の徒が邪教白蓮教を利用したのは、愚民を結社に引き入れその脱退を防止して、結社の結束を強化する手段でもあったとされている。注目すべき見解であるが、今後の展開が待望される所であらう。

#### 第四節「明代の鹽政」

本節は、一・はしがき、二・鹽の生産、三・鹽の配給、四・むすびの四項より成り、二は更に、(1)生産者竈戸、(2)團煎法とその崩壞、(3)竈戸の優遇、(4)竈戸の逃亡、(5)竈戸の階級分化に分けられ、(4)・(5)は更に幾つかに細分詳論されている。三も同様に、(1)戸口食鹽法、(2)開中法、(3)鹽引の壅滯と綱法の成立、(4)票法に分けられ、各々更に細目を立てて詳論されている。周知の如く、明代の鹽業・鹽政鹽商については、藤井宏・中山八郎・著者・寺田隆信等の諸氏によって活潑に研究が展開されてきた分野である。著者は本節において、それらの諸成果をふまえられ、新知見を提出されつつ體系的に明代の鹽政を綜合されている。本節には次の「清代の鹽政」に次ぐ頁數が充てられており、内容は極めて豊富であるが、紙數の都合もあり、既知の部分も多いので極く概略のみ紹介したい。

國初より北邊防衛を始め外患に悩まされた明代にあって鹽の果たした役割は大きい。元末、鹽徒の統領であったと思われる朱元璋は、支配領域に鹽の專賣を行って軍餉をまかなっていたが、建國後は元制を承けて專賣制度を確立した。その法は元の食鹽法をうけた「戸口(納鈔)食鹽法」と、著名な「開中法」がある。開中(開坐中鹽の略とされる)は始め直接邊鎮に軍糧を納入せしめ、鹽引を支給し



鹽場にて支鹽販運させる納糧中鹽が行われ、五割という巨利により、地の利を得た山西・陝西商人の急激な發達を促すこととなった。しかし、この制の諸弊が顯著となり、一方邊境での食糧生産が増大し、更には銀經濟の進展もあって、邊方納銀開中を経て、鹽運司に直接銀を納入して鹽引を入手する在司納銀制が主體となった。この結果、最大の兩淮鹽場の中心地揚州には山西等の巨商が集中し、鹽商間の分化が益々進行すると共に、守支に悩む鹽商は生産面にも進出し、商竈が成立することとなった。資本主義萌芽問題として注目されてきた所である。揚州巨商は内商として富を誇ったが、やがて批驗の留難や官吏の收奪等による經費増大によって鹽引購入を願わず、ために鹽引價格は暴落したが、一部有力内商がその資力によって鹽引を安値で買い占め、その賣買によって巨利を得る閹戸へと成長し、時に公の兩淮鹽利に匹敵する利を得るに至った。かくて國家の鹽利は彼等に侵奪され、鹽課は缺少し一般内商等は没落にさらされ、鹽政は崩壊寸前の状態となった。この時行われた鹽政の改革が「綱法」である。これによって舊引や堆鹽の消化が進み、國家鹽利も増大する成果をあげたが、反面鹽引購入權を窩本として特定商人に與え、その世襲獨占を許すこととなり、清代の根窩制度に連なることになる。

鹽商は利少き地には販運するを好まない。かかる地を對象として、小資本でも鹽を扱い得る「票法」が用いられたが、地域的にも限定され、弊害も多出して大きな成果はあげられてはいない。しかし、清代票法の先例としては重要な意義を認め得ると評價されている。

なお本節で注意すべきは、在司納銀開中法開始の時期について藤

井氏と異なる見解を提出されていることである。即ち、藤井氏が綿密な考證をされ、その時期を成化末年とし、食貨志の弘治五年の記を誤りとされているのに對し、著者は食貨志弘治五年直前の記により、成化年間<sup>(1)</sup>に臨時の措置として行われていた運司納銀制が、弘治五年に至って制度化され、邊方納銀制と併せ行うことが公認されたものと解釋されているのである。他の説と共に今後の研究が注意される。

#### 第五節「清代の鹽政」

前述の如く、本節は全文書き改められているが基本的には定評ある前著に依據されており、既に波多野善大氏の書評がなされているので、ここで改めて紹介する必要があると思われる。よって前著と異なる点のみ紹介したい。全文書き改められる中で、波多野氏も指摘された難解な表現は平易なものとなり、史料も本書の他の部分に合せて書き下し文に改められている。又、必要に応じて時に前著を要約され、或いは説明を補われる等の差異は隨處に見受けられるが、内容上は基本的に前著と殆んど同じと考えてよい。最大の相違点は次の部分である。即ち、前著本論部分は陶澍の改革で終り、その後については僅かに附言されているのに對し、本書では前著と前後して發表された一連の研究に依據され、七・兩淮鹽政の改革、(6)陶澍の淮南鹽政改革の次に、(7)陸建瀛の淮南改革、(8)清末における淮南鹽政とを設け、後者は更に(a)から(i)まで九つの細目を立てて詳論されている。いうまでもなく嘉慶から道光にかけて殆んど崩壊状態となった兩淮鹽場の改革は陶澍によって行われたが、彼は淮北に票法を實施して成效を収めたものの、より重要な淮南鹽務の改革には若干手をつけたのみで職を去っている。その後の改革は李星沅を

經て陸建瀛に至つてより詳密な票法改革として實施され、著效を得たものの、すぐに太平天國の亂によつて淮南鹽政は崩壊し、鹽利は太平天國の重要財源とされるに至つた。太平天國の長江下流制壓により、東西交通は分斷され、湖廣に深刻な鹽不足が生じるが、四川鹽の生産増大と湖廣への流入が活潑化し、亂後に問題となるも解決せずして清朝滅亡に至る。

以上より明らかな如く、この補完部分があつて始めて本節は清末まで完整し、本書は文字通り古代から清末までの鹽政史として完成したのであり、補完部分は本來あるべき姿に戻つたといえるのである。

#### 四

本書の該博な内容及び眞價を、如上の拙い紹介が十分に傳へ得たか否か、甚だ心許ないものがある。よつて最後に本書の特色・本書によつて與えられる知見を列擧し、その後若干の私見を附して本稿を終えたい。

一・初の本格的鹽政史研究として、從來空白であつた部分は新たに解明され、又、各代の諸成果を綜合されたことによつて、古代から清末までの鹽政の流れを一貫して理解し得ること。二・鹽が中國社會の展開、とりわけ權力の掌握・盛衰・交替について果してきた大きな役割を、各代を通して解明されたこと、三・鹽と權力の間に介在し、或いは權力を支え、或いはその基盤を蠶食した鹽商・山西商人の存在を遠く古代にまで溯つて確認されたこと。なお、傳えられる所では、著者は次の構想として山西商人を考へておられるとのことであり、寺田隆信氏の「山西商人の研究」とどの様に交錯され

るものか興味を持たれる所である。四・近世獨裁制を支えた鹽專賣制の二つの大きな流れを、唐代第五琦・劉晏の二法を原型として系統的に理解し得ること。又、宋の鹽團の制と明の爐戶團聚法、明清の綱法、明の票法と清代陶澍の票法、宋の折中と明の開中法等々、個々の制度の變遷も系統的把握が可能となつたこと。五・鹽專賣制・行鹽地制・鹽賊・天子直屬の鹽官などの「近世的特質」が既に唐宋に出現したこと。六・鹽法の寬嚴・鹽價の高低が、當該時代の社會及び權力の安定度を示す重要指標となること。七・波多野氏書評に特筆された鹽政辭典の性格が、益々充實されていること。本書は全時代をカバーしていることもあつて、索引は一〇五頁、項目數は小見出しをも入れて八千にも達せんかという豊富である。本文説明の平易さと相まつて、難解な鹽に係わる用語を理解するに不可缺といえるであらう。

以上、書評といひながら紹介に終止してきたのは他でもない。本書において始めて解明された部分は今後の研究の出發點として、新たに提起された諸問題と共に、今後各代の專家が個々の專論の中で取り上げられるべきものと考えられるからである。又、清代史を學ぶ筆者にとつて、前著に接した時とは異なる意味で數々の御教示をいただくことができたとはいへ、清代の部分は既に書評のある前著に基本的に依據されている以上、ここであらためて取り上げることが適當でないと考えたからである。

よつて、ここでは本書讀後の印象と清代史を學ぶ者として若干の卑見を述べ評に代えさせていたきたい。

一・本書を貫く重要主題は、歷代權力の消長に鹽が重要な役割を

果してきたことにある。權力の財政基盤に鹽の占める比率が大きければ、その減少・喪失が權力の衰退・滅亡をもたらす事は理解し易い。しかし、五代期南唐の場合などを除けば、一般には鹽利の喪失は内部からの鹽政の崩壊によるものであり、直接的には生産者の没落・鹽商の跋扈・權要の侵奪・官僚の收奪・私鹽の横行等々に因るものである。しかし、これ等の諸弊が叢生することは、とりもなおさず權力による鹽利掌握能力が低下したことを意味し、それは權力自體の衰退の反映乃至結果と考えられる。本書はその主題が「鹽」であることから當然とはいえ、時に「鹽利の減少・喪失が原因となり、權力の衰退・滅亡を結果する」といった印象がない譯ではない。しかし注意深く讀めば、著者は全ての場合において、かかる單純な因果關係で鹽と權力との關係を論じられていたのではないことは、鹽が權力の消長に「重要な役割を果たした」、權力の衰退に「拍車をかけた」、これを「促した」といった表現が示す所である。權力の衰退は、當該時代の歴史的 성격、權力の構造と性格、社會の經濟的政治的諸矛盾、商人の性格、中國の官僚及び官僚制の特質等々、多様な角度より總合的に追求さるべき別箇の課題であらう。

二・約一世紀にわたり華北を領有した金代の鹽政は元代の部で僅かに附言されているのみである。しかし、南宋との對峙の中で南宋同様に鹽が重要な役割を果たしたと考えられること、征服王朝的ともいえる苛酷且つ特異な元制に影響を與えたこと、金における山西商人の活動と權力との關係など興味ある所であつて、濫制と併せてもう少し論述していただきたかつたように思われる。

三・著者が「結論」でいわれている中國近世の長期に亙る鹽專賣制と君主獨裁制が中國社會に賦與した「特殊な性格」とは畢竟する

に「中國社會の近代化の遲滯」を意味すると思われる。この點につき著者は専ら前著に依據されて論じられており、前著の完成度の高さを再認識させられるのであるが、その間約三十年経過していることを思う時、清代史を學ぶ一人として忸怩たる思いを禁じ得ない。勿論、渡邊淳氏が指摘される如く、明清時代の鹽業研究の契機となつた所謂資本主義萌芽問題が、その後、壁にぶつかっていること、及び前著の如き優れた研究は一方にその後遺症として後學を他の分野に向わせるといった理由はあるにせよ、渡邊氏が書評をされた臺灣、徐泓氏の「清代兩淮鹽場の研究」や、中國、張學君・冉光榮兩氏の「明清四川井鹽史稿」など、海外でこの分野の研究が進められていることを思えば、我が國でもこの分野の研究が活潑化することが望まれる。幸い近年陸續と檔案類を始め新しい史料の參看が可能となりつつあり、確かな制度的把握を特徴とする著者の研究に支えられ、鹽政・鹽業のみならず、商品流通など多方面に亙る研究の進展が期待されよう。

四・清代、鹽課が地丁に次ぐ重要財源であつたのは波多野氏書評でも取り上げられているが、權力の中樞部たる中央政府が、鹽課と關稅を中央直轄の重要財源としていたことを蛇足として附したい。即ち、順治十年、北直等十一省の地丁錢糧（原額約三一六五萬兩）から戶部に解送された額は約三三〇萬兩であつた。戶部は陝西・湖廣等の兵餉約一八〇萬兩、王公文武滿漢官の俸餉約一九〇萬兩の支出があり、これのみでは約四二萬兩の不足であつた。しかし鹽課・關稅二七二萬兩、その他三〇萬兩の收入があつて、該年戶部は二六〇萬兩の餘剰を得ている。降つて嘉慶十七年、地丁實徵は原額の約85%、加えて北・西邊の軍需、福建海防への支出もあつて、地丁項下

第三卷、一九七八年五月。

(3) 世祖實錄卷八十四、順治十一年六月癸未。

(4) 文獻叢編所收「彙核嘉慶十七年各直省錢糧出入清單」。

の收支は約二六四萬兩不足している。しかし、該年、戸部が約五百萬兩の實收を得たのは、専ら鹽課・關稅收入によるものである。關稅實徵額は四八一萬兩、これより地丁項下への流用や河工等への支出あつて、戸部解送額は二六四萬兩であつた。鹽課は實徵四七七萬兩、地方兵餉への留充分を除いた四一三萬兩が「酌撥解部並留協鄭省」分であり、約二六〇萬兩が戸部に解送されたと思われる。清朝國家權力の中樞部たる中央政府が、鹽課・關稅を直轄財源として、これに大きく依據していた様相が理解されよう。鹽の果した役割はこの意味においても、まことに大きいものがあつたといえるのである。

著者の多年にわたる鹽政研究の總決算ともいふべき本書の價值を以上の拙文が虧損したのではないかと危惧するものであるが、著者及び諸賢の御寛恕をお願いすると共に、末尾ながら著者の益々の御壯健と御活躍を祈念申し上げる次第である。

(一九八八・四・二五)

## 註

- (1) 「清代道光朝における淮南鹽政の改革」(東方學論集三、昭和三〇年十月)、「中國史研究」第二、「清代咸豐朝における淮南鹽政の改革」(東洋史研究一六―三、昭和三〇年三月)、「中國史研究」第二、「清代淮南鹽販路の爭奪について」(史林三九―四・五、昭和三年七・九月)「中國史研究」第一など。

(2) 渡邊惇氏書評、徐泓著「清代兩淮鹽場的研究」(近代中國

一九八七年九月 京都 法律文化社  
A5版 九三二頁 一八、〇〇〇圓